

8 糖尿病チーム医療における寸劇の効果

— 渡る世間は糖尿病ばかり —

板垣 雅美・高宮 愛子・小式澤絵里
大館 麻子・井口貴美子・佐藤 靖子
植木 正人・上原由美子・宮腰 将史
糖尿病勉強会スタッフ一同
県立中央病院西4病棟

当院で毎年秋に行っている糖尿病フェアにおいて、昨年「渡る世間は糖尿病ばかり」という寸劇を行った。まず宮腰医師による台本が完成し、キャストを募り、広報を開始した。練習にスタッフ全員がそろうことはなかったが、いろいろな職種の人たちが集まってひとつのものをつくっていく過程は、とても楽しかった。そして発表当日、マスコミ関係者と150名近くの患者さんを迎え、1幕から3幕・カーテンコールまで大きな失敗なく無事終了した。

スタッフと患者さんのアンケートでは、寸劇は、スタッフには達成感と結束力をもたらし、患者さんにとっては、わかりやすく楽しい学びの場となった。

9 フットケアに関するスタッフの意識調査を行って

— フットケア回診を始めての変化 —

殖栗 加代・風間 恵美・島峰以久子
丸山 順子・横山美智子・八幡 和明
厚生連長岡中央総合病院

病棟全体のフットケアに役立てる為、H19年9月に患者の足に関するスタッフの意識調査を行い、意識や関心の低さがわかった。そこで足観察図を用い、入院時とその後は週1回看護師2名で患者全員の足の観察を行っていった。それをより確実に行う為にH20年6月より、フットケア回診を定例化した。週1回定期的に観察し、認定看護師の助言を受けながらアセスメントを行い、処置やケアの指導を行っている。H21年1月再び行った意識調査で、フットケア回診や足観察図を使用してから、患者の足に関するスタッフの意識や関心が向上したことがわかった。今回の意識調査

では、フットケア回診を始めてから患者の足を観察することが定着し、又観察にとどまらず、患者のセルフケアにつながる為の、知識・技術・指導力の必要性・重要性をスタッフが実感したことがわかった。今回、患者アンケートには至らなかったが、フットケア回診を開始した後、患者自身の足への関心も強くなった印象もあった。

10 インスリン治療糖尿病患者の外来待合での意識調査

西山 陽子・岡畑 恵子・鈴木 克典*
済生会新潟第二病院看護部
同 代謝内分泌科*

【はじめに】当院では、インスリン自己注射に必要な針や血糖測定の商品を内科外来で渡している。患者は実際にどのように感じているのかアンケート調査をした。

【結果・考察】アンケートから糖尿病であることを知られたくないと感じている患者が約3割、インスリン治療の材料を今の渡され方は嫌だと感じている患者は2割であった。プライバシーの保護のために場所、方法を考慮した渡し方の検討が必要である。また、その他の意見から患者のインスリン注射・自己血糖測定に対する理解の不十分さを感じ、指導の充実をはかる必要がある。

11 GI（グリセミック・インデックス）の低い牛乳が2型糖尿病患者の食事と与える影響

山際 睦美・吉田 禪・山口 広美
古川 彩・藤塚三枝子・宗田 聡*
新潟市民病院医療技術部栄養管理科
同 内分泌代謝科*

【目的】糖尿病の食事療法において、1日の血糖値を安定させることは重要な目標のひとつである。今回、牛乳摂取のタイミングによる血糖値への影響を検討したので報告する。

【方法】当院に糖尿病教育入院した2型糖尿病患者を対象とし、朝食時牛乳摂取群9名と昼食時牛乳摂取群6名を抽出、各食前と眠前の血糖値を

レトロスペクティブに調査した。なお、牛乳摂取のタイミングを変えたのみで食事の指示単位の変更はなかった。また食事、運動療法のための患者を対象とし薬物療法併用の患者は除外した。

【結果】朝食時牛乳摂取により夕食前血糖のばらつきに減少が見られ、また昼食時牛乳摂取により眠前、朝食前血糖のばらつきに減少が見られた。

【考察】これまでに牛乳摂取による血糖上昇抑制効果はGIの観点より食後2時間との報告はあったが、それ以上の持続効果があることが考えられた。乳製品を上手に取り入れることが血糖値安定の一助になると期待される。

II. 特別講演

糖尿病の病態から食事療法を考える

茨城キリスト教大学生生活科学部
食物健康科学科教授
国立健康・栄養研究所名誉所員
認定臨床栄養指導医

板倉弘重

第2回新潟腹部救急医学会

日時 平成21年5月16日(土)
会場 チサンホテル&コンファレンスセンター新潟
4F 越後の間

一般演題

1 大腸癌イレウス術後の敗血症性ショックに対し持続的血液透析濾過エンドトキシン吸着療法が奏功した1例

田島 陽介・角田 和彦・林 雅子
田中 亮・佐藤 攻・吉田 一浩*
斎藤 徳子*

信楽園病院外科
同 腎臓内科*

大腸癌イレウス術後に生じた敗血症性ショックに対し、エンドトキシン吸着療法(以下PMX-DHP)、持続的血液濾過透析(以下CHDF)を施行し救命できた症例を経験したので報告する。

症例は63歳、男性。食欲不振、腹部膨満、便秘を訴え救急搬送された。CTとCFを施行し、直腸癌による腸閉塞症と診断した。減圧困難なため緊急手術を施行した。癌の局在は上部直腸で、全結腸・全小腸が著明に拡張していた。腸管内容を可及的に排除し、ハルトマン手術を施行した。術後1日目より高熱・血圧低下を生じ、血中プロカルシトニンの高値を認めた。症状経過と検査所見よりbacterial translocationによる敗血症性ショックと診断し、速やかにPMX-DHPおよびCHDFを施行した。直後より血圧の上昇と解熱を認め、全身状態は安定した。1日2000ml前後の多量の水様便が持続したが保存的治療で徐々に軽快し、経口摂取再開後も症状の増悪なく経過した。